

第28号

発行 2025年1月1日

編集代表 西本 孝

NOI 岡山通信

日本自然保護協会
岡山県自然観察指導員連
絡会 (NOI: Nature
Observation Instructor)

ごあいさつ

代表世話役 西本 孝

新年あけましておめでとうございます。

昨年は、新型コロナが収まる一方で、ほかのウィルスへの感染が広がり、健康管理には一段と注意が必要となりました。自然環境もいつもとは違って、夏から温暖な日が続き、県南では紅葉が12月上旬まで続きました。その後は、寒波が繰り返し到来し、寒い日が続いています。

当会は、今年、中国地方5県交流会のホスト役となります。すでにお知らせしている通り、浅口市寄島町や笠岡湾干拓地を訪問し、アッケシソウを永年保護している地元団体との交流、干拓地の現状を視察する予定です。日程を確認して、予定しておいてください。

会員の皆さんが、それぞれの地元での活動を活発化させて、観察会の企画運営、自然保護活動など会員の皆さんと一緒に進めていきましょう。

活動報告 (2024年10月~12月)

第31回自然観察会—寄島町のアッケシソウ

- 日時：10月20日(日) 10時~13時 トを訪ねて(5)」
- 場所：寄島町のアッケシソウ自生地など ●当日の様子：高橋和成さんが報告(後述)
- 内容：「岡山県の生物多様性のホットスポット

講演会と忘年会

- 日時：12月15日(日) 13時~18時 直接効果と間接効果
- 講演会：藤崎憲治先生(京都大学名誉教授) ●場所：e-Tam 自然と教育研究所
- 内容：気候温暖化が昆虫に与える影響—その ●当日の様子：高橋教恵さんが報告(後述)

今後の活動予定 (2025年12月まで)

第32回自然観察会

- 日時：4月27日(日) 10時~14時 物を観察
- 場所：毛無山(新庄村)の登山道 ●連絡先：西本 taknishi@js4.so-net.ne.jp
- 特徴：早春のブナ林の林床で開花する春植 ●その他：弁当水筒持参。少雨決行

年次総会と第33回自然観察会—和気町日笠地区

- 日時：6月8日(日) 10時~15時 ●自然観察会：13時~15時 日笠地区公民館横の日笠川や周辺の里山など(検討中)
- 場所：和気町日笠地区公民館 ●連絡先：熱田 naoko.atsuta@gmail.com
- 総会：10時~12時 年次総会

中国地方5県交流会と第34回自然観察会

- 開催日：10月25日(土)~26日(日) 保護区の視察、カブトガニ博物館の訪問、笠岡湾干拓の現状を視察する。
- 内容：中国地方5県の交流会。干潟の自然保護(仮題)の講演会と寄島町のアッケシソウ ●宿泊地は4月以降に決定。

講演会と忘年会

- 日時：12月14日(日) 13時~18時 ●場所：e-Tam 自然と教育研究所
- 講演会：小林秀司先生(岡山理科大学教授) ●連絡先：西本
- 内容：岡山の動物(仮題)

日時：2024 年 10 月 20 日（日）10 時～13 時

場所：浅口市寄島町のアッケシソウ自生地および笠岡湾干拓地

内容：「岡山県の生物多様性のホットスポットを訪ねて（5）」

報告

10 月 20 日午前中、浅口市と笠岡市の埋め立て地で、自然観察指導員 11 名の参加でアッケシソウの観察会が実施されました。当日は浅口市寄島町のアッケシソウ祭りの期間中で、好天に恵まれ、本州唯一のアッケシソウ（環境省絶滅危惧Ⅱ類）自生地でその紅葉を楽しみました（写真 1）。一般の方々もアッケシソウ見学に次々と訪れ、自然保護や絶滅危惧種への関心の高さを感じました。現地では、10 時から守る会の 2 代目会長を務められた作田雅利氏から保護に関する詳細な説明をいただきました（写真 2 と 3）。



写真 1. アッケシソウ保護区（A 地区）



写真 2. 開会にあたり、地元の保護団体を紹介する筆者



写真 3. 赤く色づいたアッケシソウを見ながら、作田先生の解説を聞いた

現地は昭和 43 年（1968）に塩田跡地などを埋め立てたもので、平成 15 年（2003）にアッケシソウの群生地が発見されました。地域の古者によると、そういえば過去に塩田周辺に赤い植物があったと思い出したそうです。2004 年に寄島町の天然記念物に指定され、その年に守る会が結成され保護活動が始まりました。保護のために年 3 回（6 月、7 月、9 月）に草刈りがなされているとのこと、ボランティアの方々の協力が欠かせないようです。

アッケシソウの名前の由来は、北海道厚岸町の牡蠣島（かきしま）で 1891 年に発見されたことによりますが、現在では当地の生育場所は消滅し、寄島町の活動をモデルとして復元が検討されているとのこと。本種は海水の流入する塩湿地にのみ生育する一年草で、植物体は棒状のサボテンのような多肉植物の特徴をもちます。

葉は一般的にイメージされるものではなく、鱗片状に退化して多肉になっています。紅葉するとこぶこぶでイチゴ味のポッキーのようになります。シーアスパラガスともいわれ、やわらかくシャキシャキ食感があり、サーモンサラダとして食されるようです。試しに、保護区外でかじってみました。塩気があり若い植物体はサラダに向いていると思いました。

保護区は塩抜き用水路沿いに A・B・C・D・E 地区があり、A 地区には展望台、C 地区には木道が整備されています（写真 4 と 5）。近隣では、香川県や愛媛県の瀬戸内沿岸にも生育地があるとのこと。



写真4. 木道からアッケシソウを間近に観察できる



写真5. C地区で色づいたアッケシソウの群生

笠岡湾干拓地のかさおか太陽の広場公園の排水路にもアッケシソウが生育しているとの情報で、午前11時半ごろに移動しました(写真6)。現地は夢と希望の大地として広大な農地開発で埋め立てられたもので、締め切り堤防治いに3.5kmに及び多目的広場がつけられています。満潮時には堤防を渗みとおって海水が流入する場所にはかなり広い面積で本種の生育が確認されました。海水の供給がある汽水域は、好適な生育環境になっている様子でした(写真7)。もとは寄島町から本種の種が撒かれたと聞きました。しかし、ヨシが茂り競合しているため、今後の保護が期待されます(写真8)。13時前には、自然観察の最後の締めで、干拓地の南西角にある排水池で野鳥観察をしました(写真9)。今回は干拓地の生物多様性と自然再生や保護にポイントがあったようで、人による開発と地域自然のダイナミックなレジリアンスに思いをはせました。



写真6. 排水路にもアッケシソウが生育。



写真7. 赤く色づくアッケシソウがあちこちに



写真8. ヨシが群生する干拓地



写真9. 野鳥が多く飛来するという排水池

講演会と忘年会 2024年12月15日

高橋教恵

- ・講演会の名称：『気候温暖化が昆虫に与える影響』-その直接効果と間接効果-
- ・日時：令和6年12月15日 13:00~15:00
- ・場所：e-Tam 自然と教育研究所
- ・主催者：NOI 岡山
- ・講師名：藤崎憲治先生（京都大学名誉教授）
- ・講演内容：地球温暖化が生態系にあたる影響を、地球において圧倒的な存在の変温動物である昆虫に焦点をあて、「直接効果」と「間接効果」というキーワードをテーマに、身近な岡山を事例に挙げながら問題を考察する。

【感想】

地球温暖化は、人類が産業革命によってもたらしたもので、そのスピードは、生物が適応できずに絶滅の危機にさらされるほどの早さで進んでいることを今回の講演で知りました(写真1)。また、テーマでもあるキーワードの「直接効果」と「間接効果」の講話は、生態系のあらゆる場面で、昆虫が登場し、重要な役割を担っていることに気づくことが出来た大変興味深い内容でした。



写真1. 講演会の様子

一番衝撃的だったのは、熱帯性の昆虫が、北上してきていることは、「直接効果」として気づいていましたが、熱帯性の昆虫の方が、相対適応度は温帯性の昆虫たちよりも限定されていることには全く気にも留めていなかった点です。適応範囲が限られているからこそ、熱帯性の昆虫たちは、爆発的に増殖し、生殖干渉に打ち勝ち、適応した環境の主にもなれる…と同時に、たった1℃という人類(恒温動物+衣服+冷暖房設備)にとって他愛のない温度差が致命的となってしまう…ある種が繁殖できなくなり、絶滅してしまうという事象は、生殖干渉で負けた在来種だけではなく、相互作用で細菌や動植物なども道連れにその地から姿を消し、他の生態系へも多大な影響を及ぼしてしまうこれらの「間接効果」には本当に恐怖を感じました。また、「シカ増加による森林破壊」「ミカンコミバエの侵入による農作物の出荷停止」「カシノナガキクイムシによるナラ枯れ」の講話も、私にとっては新鮮で興味深く聞き入ってしまいました。

地球温暖化は、経済に甚大な損失をあたえる社会問題となっていますが、もしかしたら、害虫や害獣も、人類の視点からみれば有害ですが、実は、これらの社会問題は生態系全体からの人類への警鐘で、害虫や害獣を、有用なものになるように経済を動かすことが、生態系への人類の正しい関わり方なのかもしれないと感じました。

今回の講演を聴いて、「地球温暖化対策」「生物多様性」というワードがいろいろな場面でかっこよく引用されていますが、このワードは、決してスマートな言葉ではなく、人類の「知」をもって、早急に取り組まないといけない緊急事案だと強く感じました。

自主活動 どんぐり観察会 2024年11月4日

谷口美江

11月4日(月・祝)岡山市こどもの森にて、NPO法人岡山市子どもセンター主催企画のどんぐり観察会に協力参加しました。

当日は3連休の最終日、素晴らしい秋晴れの中、下は1歳から28名(大人12名、子ども14名)の参加と子どもセンタースタッフ5名、NOIスタッフ6名で行いました。どんぐり採取用の袋を持って観察へ出発しました。

まずは、「ウラジロガシ」や「シラカシ」の並んでいるところで見比べながら観察しました(写真1)。葉の形の違い、ウラジロガシは名前の通り葉の裏が白いことなどで見分けがつくこと、白いのは口ウ物質がついていること、実は1年成や2年成がある事などの違いに驚いていました。

「ウバメガシ」の木では、葉のつき方の違いに気づき、来年の実を見つけました。入り口近くにある大きな「アラカシ」の木の下では、子どもたちが「緑色のどんぐり!」「シマシマがついている。」などと声をあげながらどんぐりを拾っていました(写真2)。



写真1. 園内のどんぐりの木を観察中



写真2. 木の下でどんぐりを探す子どもたち

「今年のマテバシイは軽い物が多い」という声がありました。そこで考えられることは、まずは2年前の受粉の時の気候変動、温暖化や花粉が風で運ばれる「風媒花」なのか虫が運ぶ「虫媒花」によっても原因の考え方が変わる、実が育つ時の環境も考えるなどとても奥が深いと感じました。中を半分に割ってみると軽い物は実が入っておらず茶色い皮だけが入っていました。「ヤマコウバシ」の実の匂いを嗅いだら懐かしい感じがしました。

イガイガの殻に守られた「クリ」の実を見つけ実の入り方をみたり、イガを触ったり、中に「クリミガの幼虫」を見つけたりしました(写真3)。そして、「アベマキ」と「クヌギ」の観察をしているとアベマキの木に「コナラシギゾウムシ」を見つけました(写真4)。子どもたちは説明よりも落ちているとんぐりを嬉しそうに拾っていましたが、自らとんぐりの形の違いや帽子の形の違いなどに気がついて教えてくれました。観察の後には、とんぐり虫の観察ととんぐりの試食会を行いました。

子どもたちはとんぐり虫を「可愛い〜」「プニプニして気持ちいい」と楽しそうにしていました(写真5)。保護者は初めはちょっと渋い顔をしていましたが、初めから気持ち悪いか拒否しては子どもの好奇心にブレーキをかけしちゃうから、黙って見守ることも大切だと話していました。途中で見つけた「コナラシギゾウムシ」を並べて観察しました。

また、「スダジイ」「ツブラジイ」は種類や採取場所別にフライパンで炒りました(写真6)。暫くすると香ばしい香りに子どもたちが「美味しそうな匂いがする」と集まってきました。「マテバシイ」「シリブカカシ」「クリ」は茹でました。

「クリみたいな味がする」と、とんぐりの美味しさにびっくりしていました(写真7)。保護者の方の中に幼少期に幼稚園でとんぐりを食べた体験をされた方がおり、お子さんにも体験させられたらと思われるようで幼少期に体験することの大切さを感じました。



写真3. クリミガの幼虫をイガの中に発見



写真4. コナラシギゾウムシの幼虫がうようよ



写真5. とんぐり虫を興味深くみるこどもたち



写真6. ツブラジイのとんぐりを炒る



写真7. はぜたシイのとんぐりの皮をめくる



写真8. 熱心に感想を書いていたこどもたち

感想の中には、色々などんぐりの種類を知ったことや拾ったこと、何処のどの種類のどんぐりが美味しかったこと、とんぐり虫に触れたことなどが良かったとの感想が多くありました(写真8)。観察会の中で親子で沢山の発見ができ、会話ができ笑顔をみられ、自然について考える良い時間になったと思いました。